
\$ tick out child en

波月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

stick out children

【Nコード】

N0405C

【作者名】

波月

【あらすじ】

退学を言い渡された問題児+ は退学免除をかけて世界を駆け巡る！！魔法とか剣とかその他もろもろのごちゃ混ぜファンタジー！！

1 §いきなり退学!?

「退学!」

「……………へ!？」

茶髪に緑目の少年の間抜けな声が昼休みの校長室に響きました。

「へ!?!じゃなくて!……………退学だよラーク・リネット君」

お昼ご飯のそばを食べつつにっこり笑う額面積がヤバそな校長先生。

「な、な、な、なんでですかっ!俺何かしましたかっ!!成績そんな悪かったですか!!!」

我に返った少年ラークが校長先生に食って掛かる。

「いやまあ、実技は悪いよねえ……………」

「うう、実用魔法はそうですけど……………でも攻撃魔法は!!!」

「それで調理実習中に鍋ぶっ飛ばしてりゃせわないよね……………」

「ううう……………」

言い返せなくなったラークはせめてもの抵抗に唸ってみた……
……意味はなかったが。

ここは国立魔法学校。世界中から子供たちが集まる一応超有名校
だったり……

ラークはその高等部二年生、なぜかいきなり校長室に呼ばれてこ
れまたいきなり窮地に陥ってたりする16歳。

「あ、でも退学理由は実技のせいじゃないよ？」

「じゃっ、じゃあなんなんですかっ!？」

校長先生の言葉で勢いづくラーク。

「胸に手を当ててよー！ー！く考え見なさい」

(……………?)

実践してみるがまったく何も浮かばないラーク。

「すみません。わかんないです」

「ホントーに?」

「ホントーに」

「ホントのホントーに?」

「ホントのホントーに」

「ホントのホントのほ……………」

「だーっ！もういいですよっ！はやく言ってくださいっ」

いかげんうざったくなくなったラークは校長に詰め寄った。

「はいはい、もううざりたいな……………」

(うざいのはお前だよっ！)

むくれつつ校長先生が口を開いた。

キモイ以外のなにもでもない。

「ラーク君さあ……………」

「はい」

「……………」

いきなり真面目に怒られそうな雰囲気になんか怯えるラーク。

「せ、せんせ？」

「てんめえ俺様のジュース飲んだらこらあっ」

「え、ええっ!?!」

ありえない退学の理由に驚き固まるラーク。

「あれは、あれはなあ……………俺様が毎日の面倒な仕事の合間に唯一の楽しみにしていた大事なジュースなんだよ！」

「うわぁ、面倒とか言っちゃったよ……………と思いつつ抗議をするラーク……………ま、当たり前っちゃ当たり前ですね。」

「そんなの生徒共同の冷蔵庫に入れておく先生が悪いんじゃないですかつ！」

生徒共同の冷蔵庫は暗黙の了解として『名前を書かないなら持ち主としての権利は放棄しろ！』と言うルールが成り立っている。

そして昨日ジャンケンで勝ったラークがジュースを飲んだわけだ。

5

「暗黙の了解なんか知るか！！学校のルールはこの俺様じゃあー！」

「ちよっ、むちゃくちゃじゃないですか！」

「どっちにしろてめえは退学だーアッハッハッハッ」

その言葉に青ざめるラーク。

「何か方法ないんですか！あやまりますから！ホントごめんなさいっ！」

「謝っても無駄ダァッハッハッ……………あ！」

高笑いしてた校長先生が何か思い出したように手を打った。

「退学取り消してほしい？」

「っ、は、はいっ！」

いきなりの申し出にも飛び付くラーク相当退学したくないんだね。

「よしっ！じゃあ世界を救ったら許したげよう！」

「あ、ありがとうっね……

……？」

「……」

「……」

「……」

「世界？」

「そ。なんかさあ、五千年前の魔物が生き返りそうなんだってー」

「それを……俺が」

目を白黒させながら問うラークに校長先生はにっこり笑った。

「だいじょーぶ！一人じゃないから……（問題見ばっかだけど）」

「なんか重要事項隠してませんか？」

「退学したくないんだよね？」

「う、そうですけど……ってやっぱりなんか隠して」

「ないんだよねえ？」

「反論の余地を与えず校長先生がたたみかけた。」

「……………はい」

「よっし！んじゃあ決まり！いざ行かん問題児の元へー！！」

「問題児！？って……………グエツ！」

そうして校長先生はラークのロープの首元を締め上げながらある場所へと向かいましたとさ。

（なんか俺色々間違った気がするー）

どんまいっ

（おいっっっ！）

18 いきなり退学！？（後書き）

ゆるーい感じにやってきましたのでゆるーい感じでこれからもゆるしくお願いします。

2 § ダメ大人

ズルズルズルズル

ズルズルズルゴツツ！

「うぐっっ！」

ズルズルズルズル

校長室から襟元をしめられたままで廊下を引きずられているせいで窒息死寸前のラークとジューズの復讐だとはかりに嬉々としてラークをそこらじゅうにぶつけまくる校長先生。

すれ違う生徒は一瞬唾然としながらも顔を背けて見なかったふりをした。

「校長！？」

しばらくするとちよつと角をまがったところで上機嫌の校長先生に声がかかる。

その声にラークの意識がうーっすらとだけ戻った。

「んお？ああ！アート先生どうされたあ？そんなありえない光景を見たような顔して」

アート先生と呼ばれた藍色の髪と目の若い男の人はポケットと二人を見てつつ立っていたが校長先生の声で我に返って激しく突っ込んだ。

「見たような顔じゃなくて見てるんですよ！なんで生徒を半殺しにしてるんですかー！！」

「ん？ね、寝てるだけだよ？」

「んなわけないでしょうっっ！！」

「せんせ……………助け……………」

意識が戻ったラクが血をダラダラと流しながら必死にアート先生に手を伸ばして言った。

「リネット！？……………ケアルー！！」

アート先生がラクに回復魔法を掛けてくれる。

「ありがとうございますー！！」

「……………チッ」

「校長？なんですかその態……………」

ヒュンツッ

「っ!!!???」

そのときアート先生の言葉を遮って校長先生の頬を掠めるように何かかものすんごい速さで通り過ぎた。

後ろの壁には穴が開いている。

「わあっ！無駄に豪華な大理石に穴があっ!!」

「次は校長先生どうですか？」

説明口調で叫んだ校長先生に立ち上がったラークがにっこり笑いながら言う。

その手はピストルの形になっていた。

「へ……………?」

「リネット?」

ラークのよくわからない台詞に首を傾げる二人。

「だからあ……………エニイガン」

シュンツッ

「「っをっっ!」」

呪文を唱えたラークのピストル型の指先から本物の銃のように魔法弾が発射された。

「ごういうことですよ？さあ、火・水・風・光・闇・樹・岩……
…どねにします？」

笑顔、そりゃもう周りがまっつ黒に見えるくらいの笑顔。

「リネット君、それはいくらなんでも……」

「あははー次の校長がいい人だといいなー」

「ええ！？殺す気！？」

「ライスリーツツ！」

「ふえ？」

ラークと校長先生のやりとりの間にアート先生がラークに催眠魔法を掛けた。

突然の眠気に襲われ倒れるラーク。

「クソツ……調子……乗って……じゃねえ……ぞ……ダメ大人どもが……」

バタツツ

「あー、アート先生？リネット君はいつもこんな性格で？」

「いやいや、もっと気のいい平和主義者ですよ？」

倒れたラークの傍には冷や汗と苦笑いの二人が残ったただけでしたとさ。

ガチャッ

アート先生は爆睡したラークを担いで校長先生に支持された部屋へと入った。

校長先生はさぼり……………それでいいのか、校長先生……………

「つか俺にどうしろと?」

室内に入ったアート先生は困ったように部屋の中を見回してみた。

そこには男子生徒二人と女子生徒二人がいたが、なんとも共通点が見受けられないおかしな組み合わせである。

「あ!アート先生、その子最後の一人ですかあ?」

一人の女子生徒が寝ているラークを指差してそう言った。

「いや、俺はここに運べって言われたただだから」

「へーそうなんだ。アハハパシリだね！」

「……………」

女子生徒の何気ない一言がアート先生のハートにグサツツと刺さった。

体育座りでの字を書きたいが教師の威厳として必死にがまんしている状態だ。

と、そんないたまれない雰囲気破ってドアがバンツツと開いて誰かが入ってきた。

「五人揃った！？説明はじめるわよ！！」

そこには学校一美人で学校一校長先生についていける人間として有名な先生が立っていた。

「クラーよ！よろしく！」

2 § ダメ大人（後書き）

前回以上にダメ文に・しょうじんします

3 § アピールタイム

「あら？なんでアートがいるの？」

「校長にこいつを運ぶように頼まれた」

何げにこの二人この学校の同期の卒業生だったりする。

と、そんなことはおいといて！

アート先生に担がれているラークを発見したクラーク先生。

「何でこの子寝てるの？」

「催眠魔法がかかっているから」

「あっそ……………」

そう言うときクラーク先生はアート先生から距離をとって……………

ズダダダダダダダダダダッ

バコーンッ

「グハッ！！」

アート先生とラークに飛び蹴を食らわせた。

「わー！かつこいー！！」

「……（ええええ）……」

それを見て目を輝かせる生徒が一名と引きまくる生徒が三名。

「あらー？ちよおつと強すぎたかしらあ？」

瓦礫の山を見つつ素敵にほえむクラー先生。

その時瓦礫の一部が持ち上がった。

「ゲホツゴホツ………な、何？」

無事帰還をはたしたのはラークでした。

アート先生は………片足だけ瓦礫からわずかに見えていた。

「起きたわね？こつちきなさい」

「へ？あ、はい。ってこごとこ？」

頭のうえに大量の？を浮かべてラークはポケットとしたまま四人の生徒の横に並んだ。

「はい！ではまず皆さんアピールタイムです！！左端からどーぞ！」

クラー先生がそう言うのと左端にいた銀髪の子がビクツとした。

「ぼ、僕？……………えっとる、ルーク・グリスです。一年です。よろしくお願ひします？」

ルークは下を向いてボソツとあいさつした。
せっかくの青目も髪に隠れて見えていない。

「てかアピールタイムって何？」

ルークのつぶやきは誰も気付かなかつた。

「次は私だよね！ベル・リードです！特技は防御魔法！みんなよろしく……………あ、二年だからね！」

テンション高く自己紹介したのはアート先生のハートを傷つけクラー先生を尊敬の眼差しで見っていた金髪碧眼少女だった。
長い髪をポニーテールにしている。

ルークはまだ眠いのか目をグシグシとこすって話はあんまり聞い
てない。

次はその隣にいた少女が口を開いた。

「ラリア・ロムです。一年で、得意魔法は実用魔法。よろしくお願ひ
します……………次の方どうぞ？」

「!!!(ま、まともだ!)」

赤髪銀眼のラリアのあまりに普通のあいさつにラークはなぜか驚いていた。

その次はラークの隣にいる黒髪黒目の恐そうな少年。
右目に額から顎までの長い傷があつて目は開いてない。

ルークは蛇に睨まれた蛙のように黒髪少年を見ていたが黒髪少年が視線に気付いたため目が合い、あわてて目を逸らしていた。

「三年、ハール・ボードだ。特技は武器強化魔法のみ!よろしくな
」!

顔に似合わず以外と気さくに笑ったのでラークの中で好感度が2
0上がった。

「はい!じゃあ最後はその地味っ子!」

「じ、地味!?!」

ルークを差し置いて地味といわれたことに落ち込むラーク。

「どーも。ラーク・リネット、二年生です。得意なのは攻撃魔法で
す……………地味なんじゃないですかね、はい。」

「ありゃ?落ち込んだ?……………ま、いつか。では本題に入る
わよ!」

のの字を書き出したラークを綺麗に無視してクラー先生は話を進

めた。

「君たち退学がかかっているわよね？」

そういつとクラー先生はみんなを一人づつ指差していった。

「いじめられっ子は試験がからつきし。MY弟子は筆記が赤点だらけ。赤髪ちゃん先生をバカにしすぎ。釣り目君はまず魔法の定義がわかってない。地味っ子は……………ああ！校長のジューズ飲んだんだったわね」

上からルーク、ベル、ラリア、ハール、ラークのようだ。

いろいろと突っ込み所満載だがラークはまず一番気になることを言っておいた。

「俺だけあきらかに理由が変ですよねえ！！」

「……………あのジューズは私が校長にお金貸して買ったものなのよ……………それがあのハゲ、自分は飲んでないからって金返さないのよ！？地味っ子の所為じゃないっつー！」

「……………ええ！？……………」

いきなりくだらない理由でキレたクラー先生に驚くハール、ルーク、ラリア。

「ええ！！それは俺が悪いですよね！ごめんなさい」

「「「……………ええ！？」「」」

なぜか納得したラークにこれまた驚く三人。

「ま、そんなこんなで個人的な理由はたくさんあるけど全員に共通するのは『協調性がない』」

「「「え？」「」」

ハール、ラーク、ラリアがまたまたまた驚いた。

「せ、せんせ……………ベルさんとラークさんですか？」

ラークが勇気を振り絞ってすこしだけ大きな声で言った。

「だって私親友みたいな子はいないもん」

「俺も深い付き合いしてるやつっていないよ？」

クラー先生の代わりに二人がそれぞれ答えた。

「ま、というわけで退学したくなかったら魔物倒してついでに協調性もつけてきなさいてな話しなわけよ。ちなみに賞金も出るわよ？」

「賞金！！？」

あれ？ラークの目が光った？

「い、いくらですか！！」

「えっと……… 20億レスだったかしら？」

いきなり食い付いたラークに若干引き気味のクラー先生。

『20億！？』

全員の声が揃った。

ちなみに1レス＝1円

「ま、その半分は私と校長がもらうけどね？」

「……えー」「……」

「だめですっ！」

ハール達不満げな声を出すも渋々引き下がる雰囲気の中、ラークだけは真っ向から反対した。

目が本気である。

「最高でも1億！これ以上は渡しません！」

「あらあ？地味っ子のくせに生意気よ？」

「ほしければ俺を倒してからにしてください！そのかわり先生が負

「けたら1ケアも渡しません！」

「そんな事言ってるのかしら」

クラー先生が不敵にほほえんで二人が戦闘態勢に入る。

「師匠がんばー！！！」

「ら、ラークさんがんばってくださいっ！！！」

なぜか応援するベルとルーク。

「とめるよ……………何なんだこの状況……………？」

「気にするだけ時間の無駄です」

「……………」

ハールとラリアはため息を吐いて行く末を案じた。

3 § アピールタイム (後書き)

コメディイからファンタジーへジャンル変えようか悩み中だったり
します……………どうしよかな？

4 § ひ属性

「ファイアー！」

「エニイガン！」

ドオンッ

「ファイアーウインドー！」

「エニイアローー！」

ドッガーーン

睨み合う二人、破壊されていく教室……………

「先生は火属性ですか？」

「地味っ子は？」

「『ひ』ですよ

「あら？同じ？」

にこやかな二人のまわりで何かがパチパチはじけている……
……ような気がする。

「勝負つく前にここが潰れるだろ………」

「でしようね」

「しょうがねえなあ………えーっと、その二年!!」

熱心に戦闘を見ているベルにハールが声をかけた。

「なんですかーいいとこなのに!」

不満そうにハールを向くベル。

「いいとこってお前なあ………あゝ!？」

ハールがふと見た視線の先には巨大な炎の固まりを掲げたクライ先生。

「や、やばっつ!お前シールドはね!!」

「はい………ちっ、めんどくせえ」

「ええっ!？」

「何でもないですよー」

「お前は正真正銘あの人の弟子だよ、うん」

ドッガーーーーンッッ

「うをつっ!」

「わあああ!」

「きゃあ!」

「あはははは!」

上からハール、ルーク、ラリア、ベル。
なんか一人変な気はするけどそこは流すべきところですよ、はい。

煙が晴れた後には立っている人影は

…二つ

「あらあ、立ってたの?」

「ええまあ」

やっぱり笑ってるのに怖い二人。

「結構魔力使ったのになあどやったの?」

「簡単ですよ。相殺すりゃいいんです」

そう言うラークの頭上にはクラー先生の魔法と同じくらい巨大な光。

「なーるほど?」

「次は行きますよー? エニイバズーカツ」

ラークの手から巨大な光の線がクラー先生に向かって行く。

「無属性でこれだけ威力があるとは立派ねえ」

「どうも」

「む、無属性にあんなのあったかな?」

「習った覚えねえな」

「うひっ! ……あ、い、いめんなさい」

「何がだ?」

ハールにびびるラーク、以外に鈍感なハール。

「その魔法は自前?」

「エニイガンの応用です」

「へー……以外と頭良い？」

「以外は必要ないですよ………さっさとけり付けますか？」

「え？」

クラー先生が驚いてる間にラークは頭上には巨大な炎、右手に風、左手に雷をそれぞれミックスしはじめた。

「なんであいつ何個も属性使えてんだよ………」

「さあ？」

「ラ、ラークさんすごいですっ！」

「あはははは！ごちゃ混ぜだあ」

無責任にコメントする傍観組。

「地味っ子火属性じゃないの!？」

「言ったじゃないですか、『非』属性だって」

「非ー!？」

「そ、なんでもありませんよ………だから『エニイ』なんです」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………… あはは、やりすぎた？」

「あたりまえだー！！」

ハールが瓦礫の中から吠えた。

「いいじゃないですか、これで20億÷5＝4億！」

（金の亡者め……………）

「あいかわらずだねえ……………レッドアイ？」

「……………！？」

突如あらわれた初老の男をみてラークが固まった。

4 §ひ属性(後書き)

次、シリアスです……………まあ今回のも笑えるのかわかんない
ですけど(汗)ほんと、ファンタジーにかえようかな……………

5の理事長

「誰だあれ？」

「私は知りませんよ」

「ぼ、僕もです」

「私もー……師匠はー？」

「知ってるわけ無いでしょー？」

「何言ってるんだ！あの方は理事長だぞ！？仮にも教師なら覚えとけ！」

『……………』

「……………」

『……………誰だっけ？』

「ええっ！？お前らそんな短時間で忘れるとかアリか！？」

気を失ってる間に存在を抹消されていて悲しくなったアート先生でした。

「そんなことより先生、理事長の存在なんて私は聞いたことがありません」

「そんなこと………まあいい、あの方は人前に入るのをひどく嫌われるからな」

「じゃあなんでここにいるんだよ？」

「そこまでは俺にも分かりかねるぞ………というか、一応教師には敬語を使おうとかいう配慮………」

「何しにきた」

アート先生がハールに言い聞かせようとしたときナイスタイミン
グでラークが喋ってみんなの視線がそちらへ向いた。

「いいさ、もつどつでも………」

人生あきらめが肝心だよアート先生！！

「何しにきたとは大層なご挨拶ですねラーク・リネット」

「俺はあんたの顔なんか見たくない、用が無いなら消えろ」

いつもとはがらつと雰囲気の変わったラークにまわりは状況を把握しかねて戸惑っている。

「用ならありますよ。退学免除のために旅に出る皆さんにあいさつをね……………退学したら後が色々大変でしょうねえ?……………自分のことで精一杯の君にそんな余力が有ったとは思いませんでした」

「っ……………そんなことくらい自分が一番わかってるさっ!……………誰でも良いです寮にいるんでこいつが消えたら呼びにきてください!」

「え、おいリネット!?!」

ラークは一方的にそう言つと大きな音を立てて部屋を出ていってしまつた。

「やれやれ短気ですねえ……………すみませんねお見苦しいところを。皆さんが今回の旅の参加者ですか?」

コクコクと頷く生徒組四名。

「がんばってきてくださいね？」

『はい……………』

「あの子、あんたとあいつってどんな関係なんだ？」

全員からの『お前が聞けよ、上級生だろがオラ』的なオーラに負けてハールが聞いた。

失礼な物言いにアート先生は慌てるが誰も気にしない。

「詳しくは言えませんが、旅をするにあたって知ってもらう必要もありますね」

理事長はにこっと笑ってラークの事を話した。

「あの子に出会ったのはある町にフラッと出かけたときなんです、そこはプライベートルームな話なんで省略して……………紆余曲折あつてあの子の魔法の才能の可能性の大きさに気付いたんです」

「そんなにすごいですか？」

「非属性なんてそうそういませんからね？」

「え？火ならそこらじゅうに……………オコアッ！」

「話が進まないから寝てなさい」

アート先生はクラー先生のパンチをくらって地面にのびた。

「というわけで才能を枯れさせるなんてもったいないので我が学校へさそつたんですが拒否されましたね」

『ええ!?!』

皆が驚くのも当たり前前、この学校はとて有名アード人気な学校で何が何でも入りたい! って言う人が後を絶たないのでした。

それなのに理事長直々の申し出を断るなんて前代未聞だったりするんですねこれが。

「そこで、交換条件にあの子が学校へ行けば私があの子の出した条件に従うと言うことにしたんですよ……………条件は経済的な援助でしたけどね?」

「ピンボーだから断つたんですか?」

何げに発言しづらいことをベルがさらっと尋ねる。

「違いますよ、あの子には守るものがあってね……………現実には厳しいものでお金が必要なんですよ。だからさっきも必死だったで

しよつ?」

あー確かに……………とさっきの戦闘を思い出して皆が頷いた。

「だから、この旅が終わればあの子は学校を辞めかねない……………
そこでみなさんにおねがいがあります」

『……………?』

四人揃ってなんですか?的に首を傾げる。

「あの子が学校を辞めたくなくなるようにしてもらいたいんです」

「で、でも……………そんなのどうやって……………」

ルークの問いに理事長はにっこり笑って答えた。

「簡単です。友達になればいいんですよ……………あの子は警戒心
は強いですけど芯はやさしい子です、今は離れても悲しくないよう
に人から距離を置いてますがこの旅であの子の守るべきものと同
等の友情を築いてください……………それはあなた達にも有益にな
ると思いますよ?」

『……………はあ』

頭が追い付かないのか生返事を返す四人。

それをみて理事長はクスクス笑った。

「一言で言えば『バカ騒ぎしてきなさい』ってことです……………で
はわたしはこれで」

そう言うと理事長も一方的に出て行ってしまった。

「何かよく分かりませんでしたけど……………とりあえずラークさん
呼んできます?」

ドンドンドンドンッ

「おいラーク!?!」

ガチャッ

「何?」

ラークはむちゃくちゃ不機嫌なときに自室のドアを連打されてむ
ちゃくちゃ不機嫌そうにドアをたたいた同級生に尋ねた。

ドアを開いた先には青い顔をした同級生。

「お前何やったんだ！？むちゃくちゃ恐そう上級生から呼び出しがかつてるぞ！」

「恐そうな上級生…………… ああ！だいじょうぶ、ありがとう」

思い出したようにそう言ってラークは寮から出ていった。

「おう来たか」

「すみません取り乱しちゃって……………」

「別に良いんじゃないか？…………… 指導室いくぞ」

「あ、さっきの部屋指導室だったんですか」

いまさらな事を言いだすラーク。

「知らなかったのか？」

「アハハ気絶してたもので」

「あ、そういえば」

納得してハールは到着した指導室の扉を開けた。

「おっかえりー」

「うるさいわよ弟子……………はやくこっちきなさい、旅について説明するから」

そう言っつて椅子に座るクラール先生。

「この机と椅子どこに……………」

「魔法なめんなよ？」

「なんでキレてんの!？」

いきなりリアリアにキレられてラークは驚いたように突っ込んだ。

「シャラーツプツ!……………はい、説明します!旅に行くときはこの学校の代表として行っている事を自覚してちゃんとローブだけは着ておくこと!あと最初に魔物退治の許可証を国王さまに貰いに行くこと以上!いってらっしやいっ!どっか適当なとこにワープ!」

『えええええええええ!?!』

シュンツツ

なんか修学旅行的なノリに首を傾げていた五人をクラール先生は見送りのことばと共にどこかへワープさせた。

「さあどこに着くかはお楽しみー」

「俺っていい……」

脇役に決まってんじゃん！

「泣いていいですか？」

5 § 理事長（後書き）

笑えない……おもいっきりドシリアスじゃねーかー（泣）てかア
ート先生かわいそ（笑）

6 お空をダイブッ

『ぎゃあああああああ！！！！！！！』

ワープ先で気付けばお空を絶賛急降下していたラーク達。

「なんで！？何で空！！てか下が見えないですけど！？」

「叫んでないでどうするか考えろよ！」

「きゃーっ！紐無しバンジー」

「わあああ！！！！！！！！！！死んじやいますっ！」

「高度どれくらいですかね……………」

下を見ても雲しかない。

上を見ても空しかない。

「ラリア、なんでそんな落ち着いてるわけ！？」

「これだけ高かったら危機感も無くなりますよ……………皆さんが
おおげさなんです」

「いやいやいや！？普通の反応だと思っよ？てかベルもなんで笑ってんの！」

とっても楽しそうにダイブ満喫中のベルが笑いながらルークに答える。

「だって防御魔法があればオールオッケー！」

「はっ！その手があったかっ！」

自分達が魔法使いだということをすっかり忘れていたルークとハール。

ラリアは冷めた目でそれを見て、ルークは恐怖のあまり意識朦朧として話を聞いてない。

「その手があったかって、私最大三人が限度だよー？」

「……………え」

ベルの言葉にルークとハールが冷や汗を流す。

(ち、やばい……………)

(このままじゃ……………)

(俺は三人のうちに入れてもらえないっ！！)

「ラ、ラーク………なんかできねえのか？」

「ハ、ハールさんこそ………」

下を見てみると薄ら地上が見えてきたような……

「俺は武器強化しかできねえよ………お？ああ！あった！」

「な、なんですか！」

「………悪い、あきらめるお前には無理だ」

「ええっ！？そんな！」

気の毒そうなハールと泣きそうなラーク………残り三人
は助かるとわかって空でおしゃべりに興じていた。

（落ちてからラークが得意っていう治癒魔法で………いやいや
いや先に死ぬよ）

だんだん地上の輪郭がはっきりしてくる。

（なんか、なんか俺の魔法で浮けるやつ！………聖で羽………
………んなの攻撃魔法じゃないからできないよ！………風？………
………風っっ！！）

助かる方法が見つかったラークは目を輝かせた。

「リトルウィンド！」

呪文を唱えたラークの足周りに風が集まってラークの体がふわっと浮いた。

「よし！」

うれしさにガッツポーズをしながら落下する四人の元に駆け付けた。

「あれ？大丈夫なの？」

「うん！いやあ死ぬかと思ったよ」

「……………誰かのグロい死体見なくてよかったですね」

「……………そうですね（なんでそんな残念そうなの！？）」

「」

ラリアの発言に若干引いたラークとハール。

そんなこんなで地上まで後100メートルほど。

「そろそろ準備するぞ」

「はい」

ハールとベルはそれぞれ呪文を唱えた。

「ヒュージソード！後は……………ストレンジハンド！」

そう唱えた瞬間、抜かれたハールの刀が巨大化して地面に刺さる。

ドゴオオンツッ

「なるほど、あれは耐えらんないね」

地面に刺さった刀からはハールの手に強烈な衝撃が伝わっていた。ハールのように手に強化魔法をかけることができないラークが持っていたら複雑骨折間違いないだろう。

「シールド」

ぼすっつ

ゆるーい感じにベルが防御魔法を唱えると地面すれすれに透明なマットのようなものがしかれてその上に三人が落ちた。

「ふー、やっと地面だ……………先生もひどいよな」

タン、と軽く地面に降り立ったラークが息を吐きながらそういった。

他のみんなも地面に足が着いてやっと落ち着いた様子で辺りを見渡す。

すぐ側にはきれいな湖、周りは木々に囲まれて何とも爽やか……

……

「……………」
「……」

7 § 皆の属性何ですか？（前書き）

今回やたらと長いです……………そして久々；

「皆の属性何ですか？」

澄んだ空！きれいな湖！大きな森！

「で？」

「で？」

「でー？」

「で？」

「うえ！？ど、どうしましょう？」

ラークがハールを見てハールがベルを見てベルがリアを見てリアがラークを見るとルークがあわててラークを見た。

「うん、どうしようもないよね」

「諦めんの速っ！！」

速答したラークにハールが突っ込んだ。

「ま、とりあえず……座ろっか」

「そうですね」

「はい」

ベルの提案にリアとルークが頷いて座った。そのくつろぎ様はさながらピクニックのよう。

「意味わかんねえよ……………」

ハールは皆の行動に疲れ気味のご様子。

「まあ落ち着くことも大事ですよ」

ポンポンとハールの肩を叩いてラークも輪に加わった。ハールも息をついてドカッと座る。

「あのさあ、気になってたんだけどさ皆の属性って何？」

「はふえ？ひつてなはったふえ？」

「え？何て言ったの？……………ってかいつのまにお弁当広げてるの！？ピクニック？森で迷ってるのにピクニック！？」

「ほろほろおふいふでふはら（そろそろお昼ですから）」

リアがめんどくさそうにつなぎさん林檎を食べる。

「ラーフはむほはへはふ？（ラークさんも食べます？）」

ルークが卵焼きをルークに差し出す。

「ふぉ！ほのはんふめえ！（おぉ！このパンうめえ！」

ハールがひとりパンにかぶりついて感動している。

「みんな『物食べながら喋っちゃいけませんっ』て習ってないの！？」

ルークがお母さんのようにそう言っつと

『記憶喪失』

なんか楽しげな返事が返ってきた。

「ありえないでしょ!?!」

やけくそになってルークがそう言っつとリアアがふーっと思をついた。

「とまあルークさんをからかうのはこの位にして」

「ええ!?!」

「ぼ、僕はそんなつもりじゃ……………げ、元気だしてください……………」

…

「ルーク……………君はいいやつだあっ！」

ガバツツ

感動でラークはルークに抱きついて涙を流した。

「そろそろ話戻していい？」

真面目な顔でベルが尋ねるとラークが目を見開いた。

「ずれたのベルのせいだよーね！？」

「地味っ子ラークが突っ込まなきゃよかったんじゃんかー」

「あの状況を俺に突っ込むなと！？てか地味っ子言うなあっ！」

「まず私からでいいですか？私は闇属性です」

二年組無視でラリアが話を進めた。

「お前まじで無慈悲だな……………ホント、闇属性とかピツタリすぎてるよ」

無視されてのの字を書き始めたラークを哀れに思っただけでハールがそう言った。

「まあそんなに上手くないですけどね。日常魔法の方が使い様によつたら相当な攻撃魔法ですから」

そう言ったラリアは手に黒い弾を浮かべて木に放った。

「ダークボール」

ドツカーン

ギギギギギ……ズドン

木が倒れた……

「どこが弱えんだよっ!？」

ハールが目を真ん丸にして煙をあげる木を見た。
ルークは恐さに震えてちぢこまっている。

「私異様に攻撃魔法のコントロールが利かないんですよ。先程のは
1兆分の1の成功です」

「「どんだけっつ!？」」

いつのまにか復活したラークと一緒にハールが突っ込んだがラリ
アはまったく気にしない。

「次はルーク君どうぞ」

「ひえ!?!」

「……………なんですか?」

「な、なんでもないよ」

ラリアにビビッてルークは返事をした。

「えっと……僕は水属性です」

「得意魔法は治癒なんだよね？」

「はい」

「ラークなんで知ってるのー？」

「ん？空から落ちてる間に話してたから」

（（二人とも結構余裕だったんだ……）（）（）

三人が心の中で突っ込む間にも会話は続く。

「でも、僕……あんまり上手くできないんです……」

「そうなの？」

ラークの問いにルークがコクンと頷いた。

「じゃあちょっとやってみてよ」

「は、はい！………アクア」

シュパンッ

ギッ、ギギギギギ

勢いのついた水が木を傾かせた。

「うーん、確かにイマイチだね」

「どこがだよ!？」

「へ?だって詠唱したら普通これくらいはいかないと……………アクア!」

ハールの突っ込みに首を傾げてラークは詠唱した。

ドッゴーーンッ

ラークの魔法で木が粉碎した。

「……………」

「む?なんかイマイチ……………」

「はあ!？」

ラークの眩きにハールが呆れたように叫ぶ。

「ねえラリア、なんかだんだん私たちの周り木が減ってるよね?」

「そうですね」

男3人（2人？）がヤイヤイ言ってる間女2人は優雅に紅茶を飲んでいた。

「うーん、この威力だと確かにこれから困るよねえ、うん、道中特訓したげるよ」

「へ！？あ、ありがとうございます！ラークさん」

「じゃあお次は私」

飲んでいた紅茶を置いてベルが立ち上がった。

「私はねー氷だよーホラ！アイス」

そうだった瞬間そばの湖がスケートリンクのようにカッチコッチになった。

「わあ！スケートリンクだ！！俺初めて見……………どわっ！」

ボシャンツッ

目を輝かせてラークが氷の上に足を乗せたとたん氷が溶けた。

「あははは！ラークは何でも使えるんだから自分で作ればいーじゃん」

バシヤツツ

「ブハツ！俺が出来るのは攻撃魔法だけなの！こんな細かいこと出来ないの！……………アイス！」

湖から上がったラークがロープをしばりつつ片手間に詠唱すると

バキツツ　メキメキメキ

湖が凍って地面がひび割れた。

「わー！すっごい！何で？」

「水を全部凍らせたため体積が増えて地面が割れたんですね」

「そのとおり……………合格！」

「そんなものいりません」

「うう……………なんか俺にだけやけに冷たくない？」

ラーリアがラークからの合格を返還した。

「……………」

ハールは何も言わないことにしたらしい……………
……………いつまで続くか見物である。

「……………（うるせえ！黙って聞いてりゃいつつもいつ……………）」
ナレーターに文句言わないでください……………消すぞ？

「あとはハールさんですよ！」

「おー？おう……………ってその前にハールでいいぞ。敬語もいらねえし」

「え？ホントに？……………よかったー！ずーっと敬語とか面倒だったんだよね。俺のこともみんな普通に呼べばいいよ」

「わたしもー」

「うん、ベルが敬語苦手なのはよくわかるよ」

「むー！なによ地味っ子ー」

「地味じゃない！」

「えと……………よろしくお願……………じゃなくて、よろしくハールさん」

ラークが落ち込みつつベルに文句を言っている間におずおずとルークがそういった。

「いや、ハールでいいって」

「いえ！ハールさんで！ラークさんとベルさんも！」

「」「ど、どつぞ……………」

なぜか頑固になったルークに若干引きつつ三人は頷いた。

「そろそろ属性言っていただけませんか？」

「いや、敬語じゃなくて……………」

「言っていただけませんか？（こっちはこのしゃべり方が普通なんだよ、うだうだ言ってるとしめるぞこら）」

「お、おう……………（恐っ）」

（（（恐い……………とてつもなく恐い……………）））

ラリアの笑顔の裏には毎回何かしら含まれている。

「俺は火属性だ」

「えー、師匠と一緒に？」

「文句あつか」

「うんー！」

「ちよっ、ベル！そこは嘘でも無いって言おうよ」

ラークがあわててベルを止めた。

「……………まあいい、俺の火魔法は大抵武器強化魔法と混ぜて使うんだよ」

「へー……………やってみてよ！」

「いや、ラーク……………俺の話聞いてたか!？」

「うん、聞いてたよ？」

「火属性だぞ!?!木に飛んだら火事になるぞ!?!」

「そしたら俺が消すよ」

そういつて巨大な水玉を作るラーク。

「バカか!?!そんなのぶつけたら消火じゃなくて森林破壊になるだろ!?!」

「んー……………別にいいじゃん、木の一本や二本」

「お前みたいなのがいるから環境破壊が止まんねえんだよ」

「当商品は地球にやさしい水を使用しております」

「意味わかんねえよ!?!」

「……………湖にむかってやればいいじゃないですか」

「「あ……………」」

冷たい目をしたラリアが二人に言った。

「そ、それじゃあ……………」

「ど、どうぞ……………」

二人はラリアの視線に青ざめていた。

((ごっ、極寒の雪山に放置されてもこれほど寒くないはずだ……………))

池の淵に立ったハールは腰に差した刀を抜いた。

「変わった形の剣……………」

ルークが刀を見てぽつと呟いた。

「これは剣じゃなくて刀つつうんだよ」

「俺それ聞いたことあるよ！確かズー……と東にあるよくわかってない国だよね？」

「なんでそんなの持ってるのー？」

ベルが首を傾げて尋ねると……………

「あー……………貰った」

バツが悪そうにハールは言葉を濁してポツツと言った。

「貰ったって誰にふえっ！」

「ちょっと！そういう事は聞かないものなの！」

「むー！むむっももむめむむむむむー！！」

「これは常識なの！しかも俺は地味っ子じゃないっ！！」

ラークは口を押さえられているベルの言葉がわかったようだ。

「もー……………知的好奇心を満たしたいって思うのは人間の性だよ！」

「そ、それは野次馬根性っていうんじゃない……………」

「なあに？ちびっ子？」

「ちび……………なんでもないです……………ごめんなさい」

「よろしい」

ベルの毒舌はラークにはちよいときつすぎたようだ。

ちなみにメンバーの身長差は最小がラリアでそこからラーク、ベル、ラーク、ハールだったりする。

そしてベルとラークを境に結構な差があったり。

「やってもいいか……?」

「」「」「」「」

無視されて悲しそうな目をしたハールをみてラークとベルとルークが頷いた。

ラリアはつまらなそうに紅茶をカップに継ぎ足した。

「んじゃ行くぞ……………炎刀!」

ぶわあっつ

ハールが刀を振った瞬間その刃先から炎が空気を切り裂いて飛んでいった。

それが湖にぶつかって水が跳ねる。

「おおーすごいね……………独特」

「それ誉め言葉か?……………でも俺はどちらかというと刀だけで喧嘩するほうが好きなんだよな」

「喧嘩とかしないから……………これから相手するの魔物だからカチンと刀を鞘に戻しながらそういつたハールにラークが呆れたように言った。

「これで全員属性がわかりましたね」

「だね、私が氷でリアが闇でハールが火でルークが水でラークが非」

「でも俺、非なんてやつ聞いたことねえぞ？」

「いや、俺もなんで使えるのかわかんないし」

自分のことなのにラークは首を傾げた。

「でもまあとりあえず、お気に入りの魔法はエニイガンとかかな？」

「ラークさんが先生に最初に撃つてたやつ？」

「そ。本当はあれの基本は無属性なんだけど、思いついた属性適当に掛け合わせて俺で創作しちゃってんだよね」

「ある意味器用だな」

半ばあきれ気味にハールが呟いた。

「んで魔力の出力を最小にしたのがエニイガンで最大がエニイミサイルかも？その進化系がブラックホール。ちなみにエニイガンの応用すれば、剣でもなんでも形作れちゃったりするんだな」

「かも？ってなんだ、かもって」

「んー、だって自分の限界まで力出したらたぶん国一つくらい跡形もなく消えそうだから」

8 森の中会ったのは熊じゃなく……

「どっすんのさコレ!？」

「分かんねえよ！」

「絶対絶命ですね」

「うわあきもいー」

「お父さん、お母さん、ポチ……………先に死んじゃうかもしれなくて
ごめんなさい」

五人がよく分からない状況に陥ったのは今から一時間ほど前……

……………

ガサガサガサ

「おい、本当にこの道で合ってるのか？」

「合っていると言えば合ってますが合っていないと言えば合ってます」

「どつちだよっ!？」

ガサガサガサ

「えっと、攻撃魔法つてのは想像力が大事だからまずは目標をどうしたいかをイメージするのがいいかな？」

「「ほー……………」」

「じゃあ……………水圧で押し潰すとか？」

「氷で全身低温火傷とかー？」

「グロツツ!？」

それぞれ好き勝って話しながら道無き道を進む魔物退治御一行。

「草で足元見えないねー……………落とし穴が在ってもわかんない」

「いや、落とし穴は無いんじゃないかな？」

草を掻き分けながら不満げに言うベルにラークは苦笑いをする。

「ラ、ラリアちゃん、その地図どんな風に書いてあるの？」

「え？これですか？」

「う、うん。今進んでるところが道として描かれてるのかなーって」

ルークはラリアの頭上に浮いている地図を指差した。
これも日常魔法のたまものである。

「こんな草だらけのところが道な分けないじゃないですか？」

『はいい！？』

ケロツとした顔で頭上の地図の存在意義を無に帰すようなラリアの発言に四人は固まった。

「じ、じゃあ今俺等どこ通ってんだよ！？」

「王都へ直線距離で進んでいるんです。その方が速いでしょう？」

「いやいや！こんな道無き道進むよりよっぽど、ちゃんとした道行くほうがスムーズだから！」

ハールとラークがラリアに状況を把握させようとするがここまで森に入り込んで後は後の祭りである。

「さあ早く進みますよ！」

「無視かよっつ！！」

状況把握の前に話を聞いてもらえていなかった。

「まあ順調に行けばあと一時間程で森は抜けますよ」

「マジ!? やったあ」

ベルがうれしそうに笑って草を掻き分けるスピードが上がった。

「本当にみなさん騒がしいで……………」

「どうしたの? 急に立ち止まってええええ!？」

「なんだ?」

「どしたの? 地味っ子ー」

「進まないの?」

ラークの変な声に後ろ三人が首を傾げる。

「どうしましょうかねー」

「呑気だなっつ!？」

「だからなんだってんだよ?」

「あれ、あれ!」

ラーク指差す先をみた三人が目を見開いて驚いた。

目の前には超巨大な岩。もうエアーズロックですかっつて言いたくなるような岩。端なんて見えないよ?

「ま、回り込むしかないかな？」

「登れないのー？」

「無理だろ」

「皆の体力が……持たないと思う」

「ここで残念なお知らせです」

「まだあんのかよ!？」

ハールが疲弊仕切った顔でそう言った。

「迂回すると肉食獣に襲われます。登ると魔物に襲われます」

『……………』

四人とも無言になった。

「ん？あれは？」

ラークが指差した先には岩に開いた思いつきり怪しそうな洞窟の入り口があった。

「見るからに……………」

「怪しいよな」

「く、暗いよ……………」

「出るかもねー」

最後のベルの言葉にルークの顔が泣きそうになった。

「あそこを通るしかないみたいですねえ」

「……………ラ、ラリア？」

「なんですか？ラークさん」

ニッコリ笑うラリア。

「今の話し聞いてた？」

ニッコリ微笑むラーク。

「な、なんか肌寒い」

「ハールウ止めてよー」

「いや、無茶言つなよ」

三人は傍観を決め込んだ……………意気地なしなことだ。

「はあ、まあこのまま話してたってしょうがないよね。行こっか」

「そうですね」

「……………あれ？」

三人がビビッているあいだに話は決まったようですね。

「置いてくよー」

「野晒しにしますよ」

「それ死んでること前提だからね!？」

こうして思いっきり怪しい洞窟へ入った五人は進んでいるうちに巨大ナメクジみたいな魔物にぐるーっと囲まれていた。

『うばあー』

「きもい、マジできもい……………塩かけたら消えるかな?」

『うばっ!?!』

ラークの弦きにあからさまにギクツとなるナメクジもどき達。

「でも塩なんてほとんどねーぞ?」

『うばああ』

やたらとつねしそうなナメクジもどき。

「めんどろです。吹っ飛ばしましょう」

「それもそうだよー」

「が、がんばります！」

「……………」

「ま、いつか」

「だな」

『ふふっふふふふふ』

『う、うばあっ！』

この洞窟に相当ストレスが溜まっていた五人は楽しそうに笑いながらナメクジもどき達に向かっていった。

あわててナメクジもどき達は五人に襲い掛かる……………が、常識が一時頭からすっぽ抜けている五人は無敵だった。

「アトラスウエーブ！」

「ソルター！」

「あはは低温火傷ー！」

「龍炎！」

「ウエーブアクア！」

上からラーク、ラリア、ベル、ハール、ルーク。

同時に魔法がナメクジもどきに襲い掛かる……………一人呪文じゃない気がするがあえて無視の方向で。

一番効いたのはラリアの呼び出した大量の塩だったようだが、結局ナメクジもどき達は跡形もなく消え去った。

「あれ？もういなくなったの？」

「あっけないですね」

ラークとラリアはつまらなさそうに次に準備していた魔法を消した。

「ま、とりあえず出口が見えてんだからいいじゃねえか」

「え、出口？」

ハールの言葉に顔を上げたラークの目に出口の明かりが見えた。

「たぶんそこを出れば王都の郊外です」

「はー！やっとゆっくりできるーっ！」

ベルが伸びをして出口へと向かった。

そしてラーク達が見た外の光景とは！？

(え、何そのやたら意味深な終わり方)

だって……………

(なんなんだよ!?)

なんかあったら楽しいのになーって

(希望かよ!?)

「ラークさん?何で百面相なんかしてるの?」

「え?い、いや?なんでもないよ」

ラークに答えたラークは光の中へと一歩を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405c/>

\$ tick out child en

2010年12月16日20時33分発行